

央部を占めている。この下総台地地域は千葉県の中でも水田の少ない地帯であるが、とりわけ八街町は水田率が7%にすぎず、その意味で典型的な畑作地域として位置づけられる。しかも、そこには約4,000 ha に上る広大な畑が広がっている。

八街町の畑作農業においては、まず専業農家率が高く、経営耕地規模が大きいという特色がきわだっている。一方、農作物については従来からここは落花生の特産地として知られている。しかし、昭和40年前後を境として落花生から野菜への転換がはかられ、現在では野菜の特産地となるに至っている。また、畜産についても順調なびが見られ、中でも酪農と養鶏においてはすでに多頭化が進んで現在では経営がほとんど専業化あるいは企業化している。

さらに町の内部については開発の歴史の上から大きく二つに分けることができる。それは明治時代初期に初めて開墾された八街地区とそれに対して歴史が古く、合併以前は別個の村だった川上地区である。八街町における水田はこのうちほとんど後者に集中している。そして、その川上地区は全体として八街地区の典型的な畑作地域にくらべて経営耕地規模および農業生産性などの点で劣っており、その意味で農業的に町の中の後進地域である。

以上のように農業上の諸要素について他市町村との比較を含めながら考察すると、八街町は農業的に非常に豊かなものを持っていることがわかる。ただし、野菜産地としての歴史ははまだ浅く、その地位を確立するにはなお数年を要するものと考えられる。また、総じて八街町の農業は東京からの距離に比して畜産を除いて集約化が立ちおけている。農業ばかりでなく町全体の都市化も今日に至るまであまり進んでいない。しかし、裏を返せばこのことによって八街町の農業はその特色を保ってきたとも言える。このようなことから、今後の農業の発展を願うとき、この地域がいたずらに都市化の波に翻弄されることがないようにということが強く望まれるのである。

琵琶湖西南岸地域の地誌的研究

山田 智子

調査地域は、琵琶湖西南岸地域で、行政的には大津市北部および志賀町南部にあたる。私は琵琶湖と沿岸住民との関係を、琵琶湖の利用を通してとらえたいと思い、昔から漁業と湖上交通の中心地であったこの地域を調査地域に選んだ。

第一章「地域の概観」では、位置・沿革・人口などを後章を理解する助けとなるよう記した。この地域は、京都に近い（京都から約20Km）、早くから開発されてきたが、昭和49年に湖西線が開通し、京都に20～30分で行けるようになったため、今後京都の影響を一層強くうけるようになるであろう。

第二章「自然」では、琵琶湖の概況、気候、植生、地形、地質をとりあげた。気候は、瀬戸内型気候に近い気候であり、温和である。植生は、大部分常緑樹を下生えとするアカマツ林である。地形は、滋賀丘陵が湖岸にせまっており、湖岸にはデルタが発達し、水系にも比較的めぐまれている。滋賀丘陵は琵琶湖の生成を知るのに重要である古琵琶湖層群から成っている。

第三章「人文」では、集落・産業・交通・開発をとりあげた。集落については土地利用、形態、立地と水利、起源、機能について調査した。産業は農業・漁業が中心で、工場は少なく小規模である。商業もあまりさかんではない。この地域は琵琶湖の最狭部にあたるため昔から交通の要地であったが、明治以後湖東に比べて交通の便があまりよくなかった。しかし昭和39年に琵琶湖大橋が完成し、昭和49年には湖西線が開通し交通の便がよくなった。そのため、宅地開発・観光開発が最近急速にすすみ、京阪神のベッドタウンおよび観光レクリエーション地域となりつつある。

第四章「水産業」では、水産業の現状、堅田漁村の変遷をとりあげた。堅田の湖岸には現在なお専業漁業者が存在し、漁業活動はさかんである。漁獲高は滋賀県下第二位で、市場は京都・大阪が中心である。淡水真珠の養殖もさかんに行なわれている。

第五章「西南岸地域の地域性」では、地域内6地区の各々の特色および地域全体の地域性について考察した。丘陵部では農家が7割以上を占め、農村的であるが、湖岸では宅地開発がめざましい。地域性に大きく影響を与えてきた要因は、琵琶湖の湖岸に立地していること、琵琶湖の最狭部に立地していること、沖積低地が狭く滋賀丘陵が湖岸にせまっていること、大津に近いこと、京都に近いことなどがあげられるが、京都に近いことがなかでも最も大きく影響を与えてきたと考えられる。京都へは現在も魚貝類・材木・切花・生乳などが出荷されており、京都への通勤者も多い。

伝統産業「川連漆器」における地域性の研究

山口 真帆子

伝統産業「川連漆器」の成立要因の中において、自然条件と人文事象のかかわり方を地理学的に考察することと、その漆器業によりいかなる地域性が編み出されているかを考察することが私の卒論で目指したことであった。

まず第一章において、川連の在る横手地域を自然・人文の面から概観した。そして、第二章では私の卒論のテーマの第一番目―地理学における自然条件と人文事象のかかわり方を、漆器業の成立から発展過程を追い、5つの項目から考察した。

漆器業成立の際、自然条件としての湿気が川連の立地を左右するほどの決定的条件とは言い得ないが、「漆器＝Japan」と言われているように湿潤な気候下に在る日本全体が漆器に必要な湿気状態に適し、それにより湿気はやはり漆塗りに必要な要因と言えるのではないだろうか。

原材料の得やすさという点では、川連は、大変有利な状態にあったし、又現在もあると言える。なお、有力な自然条件として付け加えられるものに、地元、奥山からの原木運搬に利用された皆瀬川の水連がある。

次に人文条件として挙げられるものに経済的必要性（田地不足と高い租税からくる農民の貧困さ）があった。このことは内職的に作られていた漆器が産業として確立するに至った最も強い要素と思われる。そしてその後の発展に寄与したものとして佐竹藩の援助と地元地主達の投資が挙げられる。後者は資本家として貧農層をガッチリ支配し、その後、現在までも多大な影響力を持っている。